

# 第53回

## 女心を歌う「ご当地ブルースの 流れをつくった」異質な光

今やおネエ系タレント全盛の芸能界ですが、この人が初めてテレビ画面に登場したときのことを思い出すと、隔世の感を禁じ得ません。美川憲一です。

デビュー時は、大映ニューフェイス出身にふさわしい笑顔が似合う青春アイドル路線だったそうで、第2弾シングルの題名が『あの娘が好きと云った花』だったことから、それは容易に想像できます。

私が初めてテレビ画面を通して美川を見たのは昭和41年、笑顔を見せずに『柳ヶ瀬ブルース』を直立不動で歌っている姿でした。

当時、中学生だった私にとって美男の若手低音歌手といえば、『恋物語』の久保浩の存在がありました。青春プラウン管の中的美川からは、青春歌謡の久保とは明らかに一線を画す「異質な光」を感じたものでした。

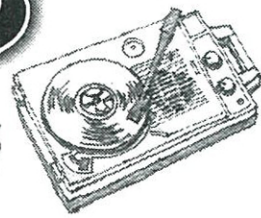
この違和感は数年後、高校生になってから観たATG映画『薔薇の葬列』に登場するピーターを見たときと共鳴していて、今思えば、ノンセ

クシユアルなムードが醸し出す妖しさが、十代の少年には刺激的だったと納得できるのですが、それでもな

### 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



お当時の美川には近寄りたいたい凛々しさも感じられ、その低音の響きと共に忘れがたく迫ってきたものでした。

久保浩と美川とで決定的に違っていたことは、「青春歌謡対ご当地ソング」という歌謡ジャンルであり、歌われている世界でした。「君に失恋した僕」の物語を歌う久保に対し、『柳ヶ瀬ブルース』のほうは、主人公を男女どちらにすることも想像可能な歌詞にもかかわらず、美川が歌うことによって「男に泣かされた女性」の物語イメージが植え付けられ、ここで美川の人生が変わります。「明るい青春」よりも「夜の世界」を歌うことで、美川の「異質な光」が輝きを放ったのです。



『柳ヶ瀬ブルース』の大ヒットはその後の昭和歌謡にいくつもの大きな流れを生み出します。日本各地の盛り場名(あるいは県名、都市名)にブルースをつけた、いわゆる「ご当地ソング」の流行です。「ご当地」に「ソング」という平凡な二つの言葉が組み合わせられた新造語は、有線放送の普及と共に、多くのヒット曲を誕生させる原動力となりました。

実は『柳ヶ瀬ブルース』は、伊豆長岡で流しをしていた、鉦路出身の宇佐英雄(『鉦路の夜』も作詞作曲)が自身の失恋をテーマにした『長岡ブルース』が原曲だったのですが、宇佐が岐阜の盛り場、柳ヶ瀬を訪れたことから、題名と共に歌の運命が変わりました。

『柳ヶ瀬ブルース』と同年には、島和彦、森進一らがブレイク、「女心」を歌う若手男性歌手の存在がクローズアップされるような流れも生まれます。美川という名は、木曾川、長良川、揖斐川という中京圏を流れる3本の「美しい川」にちなんだようですが、美川は「ご当地、ブルース、女心」を歌うパイオニア・シンガーとして新たな流れを生み出していたのです。